詩

石内秀典
尾崎与里子
山本英子
選

特選

さくら

正法寺町
高井　豊

さくらの花が舞い降りる
音もなく地に落ちる
落ちるまでのわずかな時間
花びらは
空ともよべない空間に
やさしい文字を書く
誰も知らない
誰にもわからない文字を
たったひとつ　体中で書く
ほんのり赤く染めて

風が吹くと
花びらはいっせいに
いのちの文字を書き急ぐ

（評）　風が吹くといっせいに散り急ぐさくらの花びらのその一枚一枚が、誰も知らない誰にもわからない自分だけの文字を、生命ごと燃やして書いて散っていくととらえる感性の鋭い美しさに打たれます。

特選

春の雪

東近江市
前川利孝

春分
季節は春になったが
時の神は単純に日をめくらず
なにを誤ったのか
六〇日分のカレンダーを一気に戻す

今朝は寒い北風が吹き
雪が舞っている

雪はまわりの世界を白く変え
天は鉛色の雲をとどめている
梅は花を落とし切ったようだが
山茶花は最後の一輪を蓄えている
自然は芽吹きの前に身をすくめ
あたりには真冬と変わらぬ白と灰の
陰うつな光景が広がる

・・半年前
自然は
こく暑にあえぎ
少雨でダムも枯れ
水が届かず不作だったコメ作り

今年も私はこよみに忠実に
今朝から種もみを水に浸け
苗作りを始める
水槽のふたに雪が積もるのを払い除け
明日には来るであろう
春の陽光を
信じて

（評）　近年の気候の異常さにも季節逆戻りしたかの突然の雪にもゆるぐことなく、長く続けられてきたこよみ通りの米作りの作業にとりかかる。地に足つけて生きてきた作者の農業従事者としての信念とともに詩が上質に香ります。

特選

アノネノネ

西今町
やまかみ　まさよ

冬のあいだ　伸び放題にしてきた畑の
土手草を刈っている
と、耳元に　ささやきかけてくる
……アノネ　アノネ
必死になってカマをふるっている
とまた、胸元にまで　アノネ

新しい団地も出来て　車の往来もある
村はずれの小路
赤ん坊の乗るバギー車も通りかかる
まだ指しゃぶりしながら　手を振っている
この児では　なさそう

根強い草群れの中に腰をおろし
手を休め　汗をぬぐう　と
こんどは芽と目が会う

春先の路肩で　力強くハモっているのは
健気なタンポポ、スギナ、オオバコ達
久し振りに澄んだ空の気配も
疲れた背中に　ほっこり　ゆっくり
アノネノネ　アノネノネ……

（評）　春が来て土手の草刈りに励む作者の、草の芽花の芽の芽生きに気づく、子どものような生き生きとした感性が楽しいです。
タイトルが四行目の〝アノネ　アノネ〟であったら、もっとほっこりゆっくり感が出たかも――です。

入選

畑の運動会

平田町
谷澤　正己

シトシト雨も中休み
今日は楽しい運動会
カボチャはツルの三段跳び
西洋カボチャはホップステップズンズンズン
ぼっちゃんカボチャはヨチヨチヨチ
キュウリはジャンプだヒョロリヒョイ
トマトさんは重量挙げ大玉小玉もなんのその
まっ赤なお顔の力持ち

指折り数えた運動会
梅雨の晴れ間の運動会
ナスの隣はシシトウさん
二人は美味しい煮物のコンビ
時にはニシンも入り懐かしい母さんの味
里いもさんは応援団長
大きな葉っぱでフレーフレー
朝は葉っぱに銀の玉
コロコロ光ってフレーフレー
秋にはまーるく太ってね
みんなのお腹にゴールイン

収穫終った畑には
秋風涼しく吹きわたり
畑の中ではミミズやまる虫が
セッセセッセとトンネル掘って
春の準備をするんだよするんだね

（評）　畑に立って、愛情いっぱいに育てている夏野菜たちに運動会をさせている作者の満面の笑顔の明るく楽しい様子がいっぱい伝わってきます。

入選

エキストラ

犬上郡豊郷町
藤田始宏

誰だって最初はこの世にいなかったんだから
死んでもともと教えてくれたのは
あなたでした

それでも人が生まれてくると
おめでとうというのはなぜなのでしょう
そこに始まりが宿っているからでしょうか
そこに永遠があるからでしょうか

わたしは街角のエキストラでありたい

それを平凡というのなら
平凡でありたい

それをささやかというのなら
ささやかでありたい

エキストラにはエキストラの
幸せがあるのだから

（評）「エキストラ」には〝追加の　臨時の〟とは別にいま一つ〝とびきりの〟という意味があります。
市井のとるに足りない平凡なひとりひとりのそれでも他にはかけがえのない特別さへの作者の着眼に敬意と拍手を送ります。

入選

雨夜のスタートレイル

近江八幡市
中尾友貴

久しぶりの雨　唐突に降り注ぐ
鉄砲水のゲリラ　月は雲のシェルターへ
いつも通りの孤独　左は眺めがいい
吐息よどうか　窓にまとわりつかないで

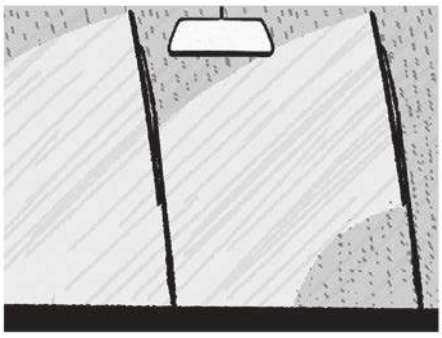
雨夜のスタートレイル
フロントガラス拭きムラこびりつき
雨夜のスタートレイル
右斜め前不意打ちのハイビーム

どしゃ降りの雨　おんおんとまだ叫ぶ
点描のキャンバス　エアコンなしオプション
いつもより遅い道　帰宅は早めがいい
吐息よどうか　風に送り帰されてよ

雨夜のスタートレイル
リアガラスの電熱線に楽譜
雨夜のスタートレイル
星一つないのに雫輝く

雨夜のスタートレイル
頼むから事故だけは起こさないで
雨夜のスタートレイル
明日買いに行こう新しいワイパー

（評）不意のどしゃ降りの雨中の走行。フロントガラスにこわれたワイパーが描き出す模様。車は星空を牽引して走っているのか、あるいは作者は映画スターのように車を引っぱるように走行しているのか。
御無事でよかったです。



佳作

孫

須越町　みなもと

佳作

秘湯の宿「新玉川温泉」

長浜市　勝木珠枝

佳作

拾い物

古沢町　野洲令子

《総評》

今回は十八篇の作品とお出会いし、今回も九篇を御紹介することになりました。これは、市の文芸作品の募集・選出という性質上やむを得ないことですが、本来文学作品には優劣や順序は無縁なはずなので、残念な思いがいつも残ります。

それでも選者三人は心にひびくものをと、どの作品にもま正面から向きあい合議いたしました。御紹介できなかった作品たちにも、しかとお出会いし拝読いたしております。

つい先日のテレビでのことです。作曲家の久石譲氏が「どうすればいい曲がつくれますか。」と訊かれて、「自作に最初に出会うのは、自分だ。自分が面白い！と思うものをつくることだ。」と答えていました。

詩作品も同じことだと思います。自分が読んで「うん！」と満足する作品を書くこと。そして、もう少し、いやもっと背伸びをしたいと思ったら、「読書はあなたの無限の宇宙(※)」です。世界中の名作の海を泳いでください。

※昔、図書館で出会ったコピー文です。

山本英子

選者吟

ジャングルジム

石内秀典

細い鉄の棒につかまりながら
遂にはいただきに
たどりつく
寄りかかるものは
なにもない
青い空に投げ出された
幼い体が
茫漠とした不安に
浮いている
どこまでもつづく
空の深さに
吸い込まれながら
ぼうぜんとした日があった

そんな深い空から
いま降り注ぐ無数の悲惨
私が暖をとれば
とおくはなれた見知らぬ幼子が
飢える
この星の孤独にふるえる

空へ投げ上げるどんな言葉が
あるだろう

よだかは※
澄み渡る空の果てを求めて飛ぶ
他の命を奪って生きてきた
贖罪のために
身が焼けるところまで

※宮沢賢治「よだかの星」

聴きながら

尾崎　与里子

ときおり表情が硬くなるその人は
俯いたまま
自分の指先の感触を
確かめているように見えた
解決は遠く
その人を苦痛の中に閉じ込めて放さない
私はなかなか言葉を見いだせないでいる

いつだったか
隣家のふうちゃんのお婆ちゃんと
ぼんやりした街灯の下で
銀茶色の狐の背を見ていたことがあった
一瞬振り返った狐の表情が
優しかったことを想い出す
ふうちゃんのお婆ちゃんも
ずっと優しい人だった
遠い夜の
冬の終りの空気の匂いと
かすかな春の気配
狐はゆっくりと
通り向かいの寺院の塀の中に
去っていった
「狐だったよね」「狐だった」
ふたりで少しの間笑った

私もあの頃
どうしても抜け出せない
無力な時間の中にいた
深い喪失は
しらずしらず絶望に繋がってしまう
その人の過酷な話を聴きながら
紅茶をもう一杯淹れ
一緒に飲む

胸の灯

山本　英子

森の奥の水の邸か
病んだきつねが帰りゆく青い扉の奥か
どこにもないけれど確かにあるその家に
鉄のブレスレットをしたかなしみなら入って
ゆけるその家に
エノラ・ゲイの副操縦士キャプテン・ルイス
が狂う精神で彫った
きのこ雲一つと一粒の涙が
そこには
ある